
僕はここにいる

酒主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕はここにいる

【著者名】

酒主

N8069D

【あらすじ】

暗い水の中。ガラス越しに見つめる影。僕はここにいる。

僕はここにいる。

僕はふとガラスの向うの人影を見る。見ると、僕は目が悪い。ただ、ぼんやりとガラスごしの人を感じる。

1人、2人、3人。

僕は目が悪い分、耳は良い。どの影がどんな事を言っているのか、聞き取れる。

今日はとても、雰囲気の悪い日だ。

水の中、前の奴が糞をした。今日に限つてのことじゃない。毎日毎日、繰り返される。それを顔に浴びながら、ひれで流す。前の奴が、と言つたが、もしかしたら、自分の糞が、廻りまわつて流れできただけなのかもしねり。

もう、どうでもいいじゃないか。

相変わらず、水の底はぬめぬめとどろどろが交りあつた様な、感触で。何だらう、何で今日はこんなに憂鬱なのか。

「あの子のこと、私、何もわかつてなかつたのよ」

「そんなに自分を責めるな」

何百回も繰り返されたガラスごしの、この会話。僕はもう慣れっこのはずなのに。何だ、何なんだ、どうしようもなく気分が悪い。

そのうち、ぷくぷくとした可愛い男の子がこちらに寄ってきた。

4歳と7ヶ月……。

何で知つてるつて？

当たり前じゃないか。僕の弟なんだから。

9歳も離れた弟。はじめは厄介な者が家にやつてきた、としか思わなかつたが、歩く様になり、しゃべるようになった。

「にーにー」「にーにー」と僕を追つかまわす、ちつこい弟。そのうち僕にとって弟は、とても大きな存在になつた。

澄んだ目は、僕を真っ直ぐ見る。

「きもい」「汚い」そう言つて僕をバカにする連中たちの目とは、ほど遠い。崇高で、神秘的で、純粋な魂が放つその光は、僕を真っ直ぐ見る。

真っ直ぐな光は、僕を照らし、僕は救われた気分になる。差し出された、ふくふくとした丸い手が水の中に入つてくる。

そう、僕のいる場所に。

「シュンちゃん、ダメッ。汚いじゃない。おでて洗つてきなさい」「ガラスごしのもう1人の影。

母親。

僕はここにいるじゃないか。なんで、汚いなんて言つて、弟の手を引っ込めさせたりするんだ。

弟はふくれつ面をして、僕のいる水槽の水をかきまわした。洗濯機の中のように、「ほほほ」と音をたて、円状の流れができる。僕達は、否が応でもその流れに乗らざるを得なくなつた。

「これっシュン！」

一瞬。

一瞬だつたが。

僕の体が、弟の手と重なつた。

「やつた、とつと、とつと触つた」

熱い。

人間の体はこんなに熱いものなのか。

弟の手で僕は火傷をしたような感覚に陥つた。

ふと、人が泣く声がした。

まだ。

また、泣いている。

僕の母親。

「あの子も、魚が好きだつたわね。毎年、たくさん金魚を買つてきて、水槽で飼うの。シュンが女の子だったら良かつたのに。どうしても、あの子の姿を重ねてしまつ……」

「女の子だったとしても、あの子の影が消えるわけじゃない」

「でも、あなた」

「とにかく、悲しんであげよ。あの子を想つてあげよ」

「いいこと言ひじやないか。

父親は何も言わないが、大好きだった。一緒にペシトショップに行つて、いろんな魚を見せに連れてってくれたり。勉強なんて、できなくても、お前らしく生きればいい。

僕は父の一言だけで生きてこれた。
ん？

死んでいるのか。

僕が魚になつたといふことは、そういう事か。

僕をいじめた奴らは、警察のお世話にでもなつていいのだらうか。それとも、何食わぬ顔をして世の中を闊歩しているのか。

どうでもいい。

そのうち、僕は体の異変に気がついた。

弟が触れた部分は、白く変色し、ぼろぼろぼろぼろ僕の体から、僕がはげ出した。

壊れていいくのがわかる。

ぼろぼろぼろと。

「おいつ。病気じゃないのか？」

ぼろぼろばがれ落ちる僕の異変に気がついたのか、父親が覗きこんだ。

僕はもともと死んでいる。

病気になつてはがれ落ちたところで、これ以上誰も悲しみなんかはしない。

数日がたち。

僕は醜く破れて、文字通り、ぼろぼろの紙ぐずみたいになつた。体は自然と宙に浮き、水の底には戻れなくなつた。あえぐ様な呼吸の音を聞いた。自然と苦しくない。水面に差し込む光が、紙ぐずの様な僕の体に差し込む。

天国にやつてくれるのか？

「とつと、死んじゃった。とつと」

僕は弟の手の平にいた。

父親も覗き込む。「かわいそう」「元気

庭のかたすみ、僕が小さい頃、埋めたどんぐりの横に埋められた。
今度は真っ暗だ。今までより、もっと悪い。

3人の声も影も感じることができなくなつた。

僕はこのまま、土の中過ごすのだろうか。

やがて、朽ち果てていく僕の体に、ギューンと痛みがはしつた。

どんぐりだ。

どんぐりが芽を出した。

僕の真ん中を突き刺して、どんどんどんどん伸びていく。

僕は芽の先端に突き刺さつたまま、土の外へ出た。

木は、どんどんどんどん伸び、家の屋根を追い越した。

良かつた。また、家族の姿を見ることが出来る。

今度の僕は、魚だつた僕の時より目がよく見えて。

弟の可愛い顔も、はつきりと見えるようになつた。

弟は小学校にあがつたのか。

立派なランドセルを背負つて出かけていく。

また、痛みが走つた。

全身を駆け巡るような、電気の。痛い、痛い、痛い。

「痛い！」

「……」

光が飛び込む。僕の目に。死んだはずの僕の目に。

「あなたつ、あなたつ。まもる衛が、衛がつ」

また、魚に戻つたのか。

目がよく見えない。

誰かが、僕の手に触つた。

手。

長いこと忘れていた僕の一部分。

父親か？

僕に覆いかぶさつて、頬をよせる。父親の涙が滴り落ちる。そして、僕の手にふくふくとした小さい手が重なり合づ。

「シユ、シユンか」

「衛、衛、お母さん、衛が」

僕は生き返った。

魚になり、どんぐりの木になり、この世に戻ってきた。

僕はもうちょっと経つて、意識がはっきりしてから気がついた。僕の枕元にある袋に。

どんぐりがいっぱい入っていた。

僕が治ること

弟が毎日毎日、どんぐりを拾ってきては、その紙袋に入れたんだ。

僕はここにいる。

僕がそう言わなくとも、みな僕の存在を感じてくれる。

僕はそれだけで幸せだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8069d/>

僕はここにいる

2010年10月8日15時31分発行